

演題 21. 尿沈渣でリンパ球系腫瘍細胞を認めた  
慢性骨髄性白血病の一例

○大土由里子 尾高郁子 里村秀行 綿引一成 松林恵子  
子 麻生裕康 (千葉県がんセンター臨床検査部)

【はじめに】尿沈渣中にみられた異型細胞をフローサイトメーター(FCM)による細胞解析を行うことで、リンパ球系腫瘍細胞と判断できた症例を経験したので報告する。

【症例】40才、男性。全身倦怠感、下肢紫斑にて近医受診。白血球増多、血小板減少を指摘され、2003年12月当センター腫瘍血液内科を受診。当初、急性リンパ性白血病が疑われたが、染色体検査ならびにその他の検査所見により、慢性骨髄性白血病のリンパ芽球性急性転化と診断された。翌年、同種末梢血幹細胞移植を実施し完全寛解。2005年、中枢神経・胸膜に再発が見られ、化学療法と放射線療法により寛解となった。さらに、2006年4月、皮下に髄外腫瘤が出現し、また、頻尿・残尿感などの症状が見られ、CT検査において膀胱後壁に腫瘤が確認された。その時点の尿定性検査は淡黄褐色、混濁(2+)、蛋白(+/-)、糖(-)、赤血球反応(2+)、白血球反応(-)であったが、尿沈渣所見では赤血球5~9/HPF、白血球100 $\leq$ /HPFと白血球が多数出現していた。また、その多くが単核の同一系統の細胞と考えられたため、尿沈渣を試料としてFCMによる細胞解析を行った。結果は、CD10<sup>+</sup>、19<sup>+</sup>、20<sup>+</sup>、DR<sup>+</sup>、34<sup>+</sup>と、Bリンパ球系の白血病細胞であることが判明した。このことから、尿中白血球は膀胱腫瘍由来であり、比較的まれなCMLの腫瘤形成性の急性転化例と考えられた。

【まとめ】一般的に尿中の白血球はViabilityが急激に低下するため、FCMによる細胞解析は不可能とされている。しかし、院内で速やかに本検査を行うことによって可能であることがわかった。また、本例は異なる検査分野間の密な連携が検査精度の向上、ならびに正確な診断に寄与できることが再認識できた症例であった。